

[hokkoku.co.jp](https://www.hokkoku.co.jp)

繊維老舗・倉庫精練、早期回復見込めず 非上場、コスト削減で「もう一度再建」 | 経済 | 石川のニュース | 北國新聞



丸井織物がTOBを実施する倉庫精練の本社＝金沢市古府町



会見した倉庫精練の羽田社長＝金沢市内

- 丸井織物、投資を検討

丸井織物(中能登町)が倉庫精練(金沢市)の株式公開買い付け(TOB)を決めたのは、繊維の「織り」と「染め」の一貫体制を強化するためだ。新型コロナや原材料高の影響で、倉庫精練は早期の業績回復が見込めず、一段の経営改善が必要と判断した。かつて石川県繊維協会会長が

トップを務めた設立100年超の「老舗」である倉庫精練は、営業赤字を11期連続で計上しており、非上場によるコスト削減などで再建を目指す。

【関連記事】倉庫精練、年内にも上場廃止 丸井織物がTOB

「複雑な思いだ。一抹のさみしさを感じるが、非上場化を契機に、もう一度再生するという思いが強い」。8日、金沢市内で開かれた倉庫精練の決算会見で、羽田学社長が上場廃止についてこう述べた。雇用は維持される予定。

同社によると、4月28日に丸井織物からTOBの打診を受けた。その後、第三者委員会で検証し、8日の取締役会でTOBへの賛同を決議した。

倉庫精練によると、公開買い付けは、同社が中期計画で目標としていた2023年3月期の営業黒字化が難しくなったことが一つの要因となった。

中期計画では、23年3月期に2千万円の営業黒字を見込んでいたものの、コロナなどの影響で計画見直しを余儀なくされ、2億円の赤字を見込む。

倉庫精練は1914(大正3)年設立で、62年に大証2部に上場。2013年に東京、大阪の証券取引所の統合に伴い、東証2部に移った。

繊維商社「西川物産」の元会長で石川県繊維協会会長を務めた西川文平氏が社長、会長、相談役などとして長く経営を担った。90年代には200億円台の売り上げを計上していたが、繊維不況の波にのまれ、22年3月期連結決算の売上高は22億7700万円となっている。

●上場基準下回る

加えて、昨年6月時点で、倉庫精練の流通株式時価総額は3億700万円となり、東証スタンダードの上場維持基準となる10億円以上を大きく下回った。

26年3月期までにこの基準を満たす必要があるが、羽田社長は「今後の上場廃止のリスクは否めない」と述べ、達成が難しいとの見通しを示した。上場には年間で数千万円の費用がかかっており「負担が大きく、上場維持には疑問を持っていた」と明かした。

羽田社長は非上場化のメリットとして親会社の丸井織物との連携が強化され、グループ全体で迅速な経営判断ができる点を挙げた。

丸井織物の宮本好雄社長は取材に対し、「デジタルプリント事業が伸びており、生産基地を金沢で拡大したい」と述べ、倉庫精練への投資を検討する方針を示した。

同社によると、完全子会社化で、製品の納期やコスト面など取引先のニーズに対応しやすくなる

利点がある。倉庫精練の経営体制はTOB成立後に検討する。

- 増収で赤字幅改善 4～6月期決算

倉庫精練の2022年4～6月期決算は増収だった。デジタルプリント事業が好調で、原材料高を受けた値上げにより赤字幅が改善した。売上高は前年同期比18.0%増の6億5900万円で、営業損失は1億600万円から6400万円の純損失は7800万円から5500万円にそれぞれ縮小した。年配当は無配に修正した。

無断転載・複製を禁じます